



日本文学全史 中古

責任編集

市古 貞次

編集

秋山 虔(本巻担当)

大久保 正

久保田 淳

堤 精二

三好 行雄

學燈社

日本文学全史 2 中古

昭和53年5月1日初版発行

定価 7000円

編者代表 市 古 貞 次
発行者 石 井 時 司
印刷者 大盛印刷株式会社
豊島区雑司が谷1-48-17

発行所

株式会社 學 燈 社

160 東京都新宿区西早稲田3-5-10
振替東京4-36253

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします。
書店または本社に直接お申し出ください。

3391-1040-1021

はしがき

一千数百年に及ぶ日本文学の流動・展開のあとを、明快・的確に捉えるには、どうしたらよいか。日本文学の歴史を跡づける方法については、すでに何回となく論議され、また種々の具体的な方途も提唱されている。これには研究者の文学研究の態度・方法が深くかかわっており、文学史の構築は研究の最後の到達点ともいうことができようが、日本文学史の記述にあたって、まず問題にされたのは、組織・編成であり、その史的区分であった。和歌の流れ、文章の変遷などを説いた書はすでに中世・近世に書かれていたが、日本文学の歴史が著されるに至つたのは、近代に入つてからである。明治二十三年十月刊行の三上参次・高津鉢三郎の『日本文学史』は「本書は實に本邦の文学史の嚆矢なり」と自ら記すように、西欧の文学史に啓発されて初めて書かれた日本文学史であり、以後の文学史研究の出発点となつた書であるが、はじめに文学の起源を述べ、以下奈良朝・平安朝・鎌倉時代・南北朝及び室町時代・江戸時代といふ時代区分のもとに叙述している。主として本書によつたア斯顿の『日本文学史』（一八九九）もこれに倣つてゐるが、江戸時代の次に東京時代を設け現代を扱つてゐるのが新しい。後年坂井衡平が大著『新撰国文学通史』（大正一五）で、大和時代・飛鳥奈良時代・平安時代・鎌倉時代・吉野京都時代・江戸時代・東京時代としているのは、ア斯顿のそれと関係があるらしい。

また三上・高津の『日本文学史』に先立つて二十三年四月に出た芳賀矢一・立花銑三郎の『国文学読本』は『国文世々の跡』などの影響をも受けた文例集・歴代選であるが、卷頭に長文の緒論があり、文学の定義・特性

等を述べ、国文学の沿革を記しているのが新鮮であった。これは簡単な文学史ともみられるが、そこでは上古・中古（^{奈五}—^{二八五}）・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・維新後と六分し、上古・中古という称を用いたのが注目される。芳賀矢一は九年後の明治三十二年『国文学史十講』を著し、これがのちに出た藤岡作太郎の『国文学史講話』とともに明治期を代表する文学史として長く重んじられたが、上古・中古・近古・近世・現代の五に分かち（近古を中世ということが今日では多いのを除いては）、ほぼ今日まで通用している時代区分を確立したということができる。

こうして日本文学史では、平安・鎌倉……等の政治の中心地によるものと、上代（上古）・中古・中世……等の時間によるもの（これは古え・中ごろ・今という古来の考えに基くと同時に、西欧の文学史の影響もあろう）とが併用されて今日に至っている。そういうなかにあって、大正年代に尾上八郎が『日本文学新史』（大正三）で時代思潮の変遷を重視し、情中心時代（上古・奈良朝・平安朝）・法中心時代（鎌倉・室町）・道中心時代（江戸）・主義中心時代（明治）というように分け、津田左右吉が『^{はれたる}文学に現 我が国民思想の研究』（大正五一〇）で、貴族文学の時代、武士文学の時代、平民文学の時代と名づけ、土居光知の「日本文学の展開」（『文学序説』大正一二）が叙事文学の時代、抒情文学の時代、物語文学の時代、主情主義否定の時代というように文学形態によるなど、新しい区分が行われている。これらの大正期の試みは、政治史的な区分にあきたらず、かつ古代・中世などの時間的区分が必ずしも固定しがたい点などを考えて、思潮・性格・形態などによつて文学の流れを展望しようとしたのであろうが、それぞれの名称その他については異論が少なくなく、多くの人々の採るところとならなかつた。

いったい歴史を記述する方法として、編年体・紀伝体・紀事本末体の三が存することは、中国の史書について

つとに言われているところである。文学史が文学の展開を捉えるものであることはもちろんあるが、同時に作品を創作した人間と、作品乃至人間（作者・読者）に密着する時間的、空間的環境を無視することはできない。それゆえこれまでに書かれた文学史は大きく史的区分を行い、編年体の時の推移を第一としながらこれに文学形態の展開を考慮に加え、作家の伝記等をも織りませていて。つまり編年体を重んじながらこれに紀伝・紀事本末体を適宜織りませて成っているといつてもよいかもしない。

以上のように文学史の編成については、種々試みられており、なお模索の域を出ない面もあるが、本書では、一般に用いられている時間による史的区分をとり、上代・中古・中世・近世・近代・現代の六区分とした。上代は大和時代、中古は平安時代、中世は鎌倉・南北朝・室町時代、近世は江戸時代に相当し、近代は明治・大正期、現代は昭和期をほぼさして。そして各時代のなかにそれぞれ十章乃至十三章を設けて、各形態の展開を十分考えながら、文学の総合的な流れを描き出すように努めたつもりである。なお各時代の初め終わりについても研究者によつて必ずしも一致していないが、本書では最も一般的であり妥当だと思われる説に従うようにした（各巻序章参照）。

以上のような構想のもとに、在來の研究成果を踏まえ、最も新しくかつ正確な文学史を提供することをめざして、学界の第一線に立つ方々を煩してそれぞの専門領域について御執筆願つたものがこの『日本文学全史』である。本書は創業三〇周年の記念出版として、學燈社から依嘱を受け、大久保正・秋山虔・久保田淳・堤精二・三好行雄および市古貞次の六名が討議を重ね企画編成したものであるが、一般にこのような多数の分担執筆はややもすると全体としての統一を欠く虞れがある。そういう難を十分考慮し、各巻については、編者がそれぞれ専門とする時代を担当して、執筆者の御協力のもとに、統一をはかり有機的な連絡・調整を行うよう極力努めたつ

はしがき

もありである。編集の不手際などからなお不十分なところも少なくないであろうが、将来の文学史研究への一つの礎石となればまことに幸いである。終わりにわれわれの企画に賛同して御協力下さった執筆者各位に心から御礼申し上げる次第である。また出版に当たつて労を惜しまず尽力された學燈社に対しても謝意を表したいと思う。

昭和五十三年三月十五日

編者代表 市古貞次

1 勅撰三集の時代	28
嵯峨朝の歴史的意義	28
文章経國の思想	30
勅撰三集	32
嵯	
2 僧団の文学	36
宮廷文学圏との交渉	36
空海	38
入唐者の記録	39
3 菅家三代とその周囲	40
I 仁明朝の意義	40
転換期としての仁明朝	40
述志の詩人、小野篁	42
II 菅原道真	43
家門の伝統	43
文人相輕んず	45
詩人無用の論	46
詩人的世界	48
4 日本靈異記	50

序 章

目 次

中古の文学 15 / 唐風文学の意味 16 / 日本文学の自立 18 / 物語
 文学の誕生 20 / 日記文学の発生 21 / 女性的発想の意味 22 / 女
 を担い手とする文学 23 / 中古文学の創造性について 26

第一章 唐 風 謳 歌

書名、編集の目的、著者 50 / 所収説話の諸性格 52 / 成立過程と伝
本 55

5 国史の編纂とその推移

六国史の編纂 57 / 類聚国史・日本紀略など 60

第二章 古今和歌集とその時代

1 万葉から古今へ

万葉歌のゆくえ 62 / 万葉歌・古歌の伝承享受 64 / 和歌の社会的上
昇 66 / 古今的表現 68 / 漢詩から和歌へ 70 / 万葉から古今へ 72

2 古今和歌集の世界とその基盤

屏風歌の世界 73 / 歌合の歴史 76 / 新撰万葉集 78 / 宇多天皇か
ら醍醐天皇へ 81 / 古今集の組織・内容 83 / 古今集の成立 85
「仮名序」の世界 87 / 古今集の撰者 90 / 主要歌人たち 92 / 古
今集和歌の特質 95 / 古今集和歌の修辞技法 97 / 古今集の伝本 99
古今集以後 100

3 歌謡

中古の歌謡 101 / 神楽歌 102 / 催馬楽 105 / 風俗歌 107 / 東遊
108

4 将門記とその位相

書名 109 / 諸本と内容 110 / 作者と成立 110 / 作者の姿勢 113
作品の性格 115

第三章 物語・日記文学の形成

1 物語文学の形成

古伝承の世界 118 / モノガタリという語とその意味 120 / 物語文学前
史—漢文述作 121 / ムカシガタリから「今は昔」へ 124 / 初期作り物
語の誕生—散逸二作品 125

2 竹取物語

物語のいできはじめのおや 128 / 成立時点と作者 129 / 素材と独創
130 / 主題と達成 133 / 伝本 135

3 伊勢物語と平中物語

平仮名の文学 136 / 伊勢物語の成立 137 / 在原業平と昔男 138 / 恋
の物語 140 / 伊勢物語の作者と読者 141 / 伊勢物語の方法と構造
伊勢物語の伝本と書名 145 / 歌物語時代 147 / 平中物語と平貞文 148 143
伊勢物語から平中物語へ 149

4 大和物語と歌語り

歌語り 151 / 大和物語の成立と作者・書名説 152 / 大和物語の特性 154
歌物語の展開と限界 155 / 大和物語の伝本 157

5 土佐日記

成立 158 / 作品形成 160 / 女性仮託の問題 164 / 文学史的意義 165
享受史と伝本 167

6 蜻 蛭 日 記 :

作者 168 / 上・中・下巻の展開 169 / 蜻蛉日記の本質 173 / 成立 175
 文学史的意義 176 / 享受史と伝本 177

7 篠物語と多武峯少将物語 :

篠物語 178 / 多武峯少将物語 179

8 うつほ物語 :

題号と巻名 181 / 作者と成立年代 182 / 三宝絵序文と物語界の状況 185
 長篇物語の始発 187 / 反好色的人間像の登場 189 / 続篇への要求・新しい人間意識 190 / 主題意識の確立 192 / 本文の問題 194

9 落窪 物語 :

成立と構成 195 / 繼子物の完成と物語の現実化 197 / 続篇の追補 198

第四章 後撰和歌集・拾遺和歌集の時代

1 後撰和歌集の時代 :

古今集から後撰集へ 202 / 後撰集の世界 204 / 後撰集の歌の性格 207
 「場」と人間関係の伝達 208 / 後撰集の表現と歌風 211 / 後撰集の成立とその背景 213 / 後撰集の伝本 214 / 後撰集時代の私家集 215
 天徳四年内裏歌合 219

2 拾遺抄と拾遺和歌集 :

221

202

195

181

178

168

I 拾遺和歌集時代の史的展望	221
後撰集時代の終焉 221 / 花山院と和歌愛好 222 / 藤原道長の権勢と和	
歌 224 / 後拾遺集時代の始発 226	
II 藤原公任の歌学書とその美学	227
古今和歌六帖 227 / 藤原公任の歌学書 228 / 藤原公任の美学 230	
III 拾遺抄・拾遺和歌集	232
性格と呼称 232 / 伝本の系統 233 / 成立の問題 234 / 組織と内容 236	
構造と詠風 238	
IV 拾遺和歌集時代的主要歌人と私家集	239
男性歌人たち 239 / 女流歌人たち 241	
第五章 一条朝前後	232
1 漢文学と仏教文学	227
I 漢文学	244
村上朝の漢文学中興 244 / 重代の文人たち 245 / 詩宴の盛行と和習化	
247 / 傍流の文人たち 248 / 一条朝前夜 249 / 一条朝の文壇 250	
一条朝の文人たち 252 / 属文の卿相 253 / 本朝麗藻の世界 255	
II 仏教文学	244
漢詩文と仏教 256 / 劝学会 257 / 祀教詩と狂言綺語 259 / 往生要集 261	
2 枕草子と清少納言	263
書名の問題 263 / 諸本の評価 265 / 成立の時期 267 / 成立の事情 269	
作者の伝記 271 / 日記的章段 273 / 類聚章段 275 / 隨想章段 276	
後宮の文明の記録 277	

第六章 源氏物語の世界	3 和泉式部日記···										
	書名の問題 280 / 虚構の方法 287	/ 伝本の系統 281 / 和泉式部について 289									
	/ 家集との関係										
1 紫式部日記・家集···											
	I 紫式部···										
	家系と生い立ち 294 / 娘・妻・寡婦 296	/ 宮仕え・晩年 298									
	II 紫式部日記···										
	構成と原形 299 / 主題と表現 303	/ 成立時期と目的 304 / 伝本と本									
	文資料 304										
	III 紫式部集···										
2 源氏物語の世界···											
	I 成立と構想···										
	現存形態と原初形態 308 / 成立時期 310	/ 成立過程と構想論 312									
	II 主題と構造···										
	第一部の世界 315 / 第二部の世界 317	/ 第三部の世界 319									
	III 世界形成の独自性···										
	史実と虚構 321 / いわゆる草子地の問題 324										
	IV 伝本と注釈···										
	平安時代の伝本と享受 325 / 河内本と青表紙本 327	/ 注釈史 329									
325	321	315	308	308	305	299	294	294	294	294	280

1 狹衣物語	334
後期物語としての評価	334
開	336
世界の色調・素材など	339
構成と展	335
浜松中納言物語の作者	341
成立・	342
2 浜松中納言物語	346
作者・書名と成立年代	346
帰国後の物語	349
物語の特色	350
影響・研究史・伝本	352
3 夜の寝覚	347
作者と成立時期	353
四部構造の理解	359
書名と主題の問題	355
人物・構想・文章の特色	361
中間と末尾の欠巻	357
伝本について	363
4 堤中納言物語	353
短篇物語集の形成と短篇の種々相	365
物語に対する享受者の関心	369
影響・伝本・研究史	371
作者・編者・成立	367
短篇	368
5 住吉物語・とりかへばや、その他	365
物語の改作・変貌	372
古本住吉物語現存本の内容	373
古本住吉物語に	374
関する資料	374
古本住吉と現存諸本との間	375
とりかへばや物語	375
現存本の内容	376
古とりかへばや物語の資料	378
とりかへばや物	378
語と有明の別	379
6 散逸物語	380
十世紀成立の散逸物語リスト	380
交野の少将・猶野物語と隠れ蓑	381
十一世紀流布あるいは成立の散逸物語リスト	382
隠れ蓑と十一世紀の	382

物語 383 / 平安末から鎌倉初期にかけての散逸物語 384

7 更級日記・成尋阿闍梨母集・讃岐典侍日記

- I 更 級 日 記 385
- 作者と更級日記の世界 385 / 構成と特質 388 / 本文の問題 390
- II 成尋阿闍梨母集 391
- 成尋とその母 391 / 構成と成立 392
- III 讃岐典侍日記 394
- 讃岐典侍日記と作者 394 / 日記の世界 395 / 成立事情 396

第八章 歴史物語の誕生

1 栄花物語

- 成立の事情 400 / 成立の動機 401 / 作者 404 / 続篇の作者 407
- 内容の特色 408 / 本文の伝写 412

2 大鏡・今鏡

- I 大 鏡 400
- 成立 414 / 趣向 416 / 説話的手法 418 / 歴史叙述の特質 419 / 批判性とその位相 421 / 諸本 424
- II 今 鏡 426
- 内容 426 / 成立 427 / 性格 428

426

414

414

400

394

391

385 385

第九章 歌壇の新動向

1 後朱雀・後冷泉朝の歌壇	432
後朱雀朝前夜・長元八年賀陽院水閣歌合 / 能因の位置 / 相模	
と後宮文芸 / 和歌六人党と後冷泉朝の歌壇 / 歌壇後援者と集	
成事業 443 / 権門の歌人 445 / 数奇の人々 446 / 院政期へ 448	
2 後拾遺和歌集の成立とその時代	449
白河朝の歌壇と撰者 449 / 成立過程と伝本 452 / 資料と構成 455	
歌風と批判 459	
3 金葉和歌集と詞花和歌集	461
I 院政時代の和歌	461
制度化と新風 461 / 堀河朝の和歌－寛治期 463 / 康和の時勢粧 465	
堀河院艶書合から堀河百首へ 467 / 堀河百首の詠進 470	
II 金葉和歌集	473
鳥羽朝の和歌 473 / 金葉集の撰進 475 / 金葉集の歌風 476	
III 詞花和歌集	478
鳥羽院政と崇徳朝歌壇 478 / 崇徳朝歌壇の形成 479 / 詞花集の下命と	
久安百首 480 / 詞花集の撰進 482 / 難・破『詞花』 484	
4 歌論歌学の時代	485
経信と通俊 485 / 六条藤家 487 / 源俊頼 490 / 歌学の発展 495	
第十章 漢文学と説話文学	495
1 漢文学の展開	500

終

章

索引

参考文献

平安末期の王朝憧憬 543 / 古代と中国への関心 545 / 平安末期の主要
文学者 546

579 549

大江匡衡の死と漢文学の趨勢 500 / 藤原明衡の生涯と著述 501 / 大江	匡房の生涯と著述 504 / 藤原敦光の活躍 507 / 本朝続文粹と朝野群載
512 509 / 中右記部類紙背漢詩集と本朝無題詩 509 / 啓蒙書と類書の編纂	/ 陸奥話記の世界 513 / 藤原頼長と経学 514
2 仏教説話の諸相	
法華驗記の世界 515 / 往生伝の展開 517	3 今昔物語集の世界とその周辺
I 今昔物語集	
今昔物語集の概要 521 / 源隆国との関係 522 / 撰者像 523 / 散逸字	治大納言物語の影響 524 / 背景と動機 526 / 組織 528 / 文体 532
文学的特色 533 / 資料からの影響と今昔の独自性 535	II 周辺の作品
百座法談聞書抄その他 537 / 古本説話集 539 / 中外抄と江談抄 541	537
521	521
	515